

七草法要が二月二日に勤まりました。七草の入ったお粥を食べる日ですが、七草とは正式には「七草の節句」のことです。摘んできた七種の草を切るではなくたいてい碎きお粥に入れるのです。ちなみに、芹は芹ですが、薺はペンペン草、御形は母子草、繁縷ははこべ、仏の座は田平子、菘は蕪、蘿蔔は大根のことだそうです。今やセットになって売っているから誰でも手に入り便利になりました。昔も今も健康第一です。七草は**一光三尊善光寺如来の御縁日の事**です。我々が亡くなる命終に我々をお迎えに出て下さる御仏様です。縁なき衆生は救いがたしと申します。縁は自分で導くものです。我々人間にとって一生最後の儀式に際し、重要な役目を以って**極楽往生を導き給う**のです。唯、信心欠如の方々には縁なき事です。時は待ってくれません。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

五木寛之師は、嘗て見る事ができ、手で触れることができ、実際にいくことができる世界には「信じることなど必要ない。退屈しながらそこへ行けばいいだけのことだ。信じる」という行為は、人間のすることのなかで、もっともスリルと感動にみちた賭けである。**なんの保証も証明もないことを信じ**、その物語に人生をあずけるのだから、不合理ゆえにわれ信ず」という言葉を私は信じている。浄土という物語を信じる。・・・なぜならそれは**私に生きる元気をあたえてくれる物語**だからである。』と書き記している。

この世は不可思議の世界であります。目に見えない世界が多く存在し、時間ですら刻々進む時を動いているなど感じる事も少なく、あわてるのが関の山です。無常迅速といえます。疑い無き我等無我夢中、遮二無二進んで念仏申し、極楽へ往く姿が目に見えなくなります。

元曹洞宗管長板橋興宗禅師は【おんぶの文化を見直そう】と言われ、その理由として、対面型のだっこは顔が見えていいと思うのですが」とし、禅師の思惑は親の背中に子供が、べったとくつくつから密着の度合いも大きい。子供が全身で親のぬくもりや愛情を感じ取る事が出来る。それと大事な**のは子供の目線と親の目線が同じ高さであるから親と子が同じ景色を見、親が今何をしているか仕草も解る。】**と昔は昔、今は今なのかもしれませんが変わる事を良しと、するのは如何なものかと私も思い感じるところです。嫁のすることには口を出さない、という風潮が強くなり、他人行儀に成ってきました。嫁も家族の一人です。戦後米国の日本潰の教育に侵され、国の為とか、地域の為とか、一族の為にという団結が壊され、**家族ですらマトマリガ無くな**ってきました。多きく力が出ないのは団結力が亡くなってしまったかからと言えるでしょう。共存共栄の思想が乏しく成ってしまった今日ですが、我々は社会の存亡を掛けて各家庭、一族の団結を望むものです。**つながりを小さくするのは簡単ですが現状の維持、大きくするのは至難の業**です。恭儉を開こう。高田好胤師の話によれば「何を見、何を聞いても批判的な考え方しかない人が多いもので、最近は一億層評論家時代とかで、とくにそういう手合いが多いようです。それは教える人の心を通して、あるいは姿を通して、**教えるをうけるといふ心ができていないからではないでしょうか。**」と、同調するばかりが良いとは思いませんが我田引水の傾向にあるのは間違いないと思います。